

教科書と対比して本県の歴史をまとめた「教科書と一緒に読む津軽の歴史」



津軽地域の歴史を掘り下げた書籍「教科書と一緒に読む津軽の歴史」がこのほど、弘前大学出版会から刊行された。歴史教科書では中央の視点から見た政治や文化が主に取り上げられ、本県を含む北東北が表舞台に立つことは少ない。地方の歴史にも目を向けてもらおうと、弘前大学教育学部の

篠塚明彦教授と小瑤史朗准教授が中心となり、同大教育学部の教員とOBが、小・中学校の教科書から浮かぶ疑問や同時代の本県周辺の動きを一冊にまとめた。篠塚教授は「中学校教科書をベースに、別の視点から津軽の歴史を考えるきっかけになれば」と期待している。(小泉結香)

津軽視点で歴史捉え

弘大教授らが書籍 教科書の中央史と対比

岩木山周辺の開拓に伴って設立された岩木実験農場。現在は津軽カントリークラブ百沢コースとなっている(齋藤尚子さん提供)

小瑤史朗准教授



篠塚明彦教授



「身近な魅力に目を」



同書は、各章の始めに「教科書では」として、中学校教科書の概要を時代ごとにまとめている。導入部分を設け、本題である北東北や本県の出来事を、教科書の主眼である中央史と関連づけて対比している。

中央で律令国家が形成された9〜11世紀、教科書の記述は、中央政権が東北地方を制圧するために大軍を送り込んだことにとどまる。同書は、北東北に集落の周りを空堀で囲み、高い丘陵や山の上に作る防御性集落の遺跡が多く残っていると指摘。農耕社会が誕生し、権力争いが生まれた弥生時代に多く作られたことに注目し、当時の北東北では集落間の戦乱や統合があり、独自の権力体制を築いていたことを解説する。

このうち、青森市浪岡地区の高屋敷館遺跡は保存状態が非常に良好で、防御性集落の様相を知るには最適だという。篠塚教授は「遺跡など、貴重なものが身近にあっても魅力に気づかない人は多い。地元の歴史に目を向けてほしい」と話す。

また「岩木山から眺める戦後日本」の章は、教科書では終戦を機に社会が転換期を迎えたとして、戦時と戦後を断絶したものと捉えていると指摘する。一方、本書では岩木山周辺で戦地から引き揚げた人々による戦後の土地開拓に着目。戦中同様、戦後も国策に翻弄され続け、困難な開墾作業で戦時中と変わらぬ苦しい生活を送った人々に焦点を当てた。食糧増産を図る国の思惑と、農地には不向きだった現地の実情との間に大きな開きがあったことを解説している。

篠塚教授は「教科書では時代のハイライトとして大きな出来事が取り上げられるが、それぞれの地域でがんばった人がいて今の日本があることを知ってほしい」、小瑤准教授は「子どもにも教える立場である学校の先生にももちろん、一般の人にも身近な地域について発見がある本ができたと思う」と話した。

A5判、全165頁、1700円(税抜き)。県内の書店で販売している。

※この記事は東奥日報社の提供です。
[問合せ先] 弘前大学出版会
hupress@hirosaki-u.ac.jp
この画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。